

発表者 稲田 聡子

テーマ 「一人ひとりの多様性を認め合い、個性を生かす教育」

稲田聡子といます。よろしく願いいたします。

今日はいわゆる区民というよりも当事者としてお話をしたいので、あえて全てフリーハンドでやらせていただきます。

まず、私がなぜ中野にいるかなのですけれども、これが結構しゃれにならなくて、もともと親の転勤で高校入学と同時に中野の当時の上高田に引っ越してきたのです。大学院修了まで一応いました。その後、大学院を修了して、二浪して地方公務員、山梨県庁なのですけれども、正規職員の就職ということで採用されまして、その後10年以上山梨に住んで、東京図書館、図書館、専門図書館、全部やりました。当然、行政職なので、地方行政全般やります。一応、事務職としての仕事もあります。

残念ながら、結構ハードな職場なので、ひどい精神疾患を何度か患いまして、都内の病院に転院して原因を探ったところ、大人の発達障害、ADHDが判明したのです。ちょっと無理ということで、退職して、その後港区に転居して実家に戻ったのですが、実は、家族の事情もありまして、もう、無理ということで、住み慣れた中野に避難してくる形で引っ越してきました。来年で5年になります。

今、私が仕事として取り組んでいるのは、物書きでもあり、ミュージシャンでもあり、パフォーマーでもあるのですけれども、精神疾患や発達障害を持つ全国の仲間とつながって、DVや虐待の後遺症を持つサバイバーとして取材を受けています。地上波にも何度か出させてもらって、新聞の取材も来ました。

あと、発達障害がほかの障害とはあまりにも違うのはユニーク、これは面白いという意味ではなく、個性的なのです。多分、支援が追いつかないのですよ。しかも、この支援は9割方お金で解決するのでちょっと厄介なのですけれども、その状況を訴えること、多分、既存の福祉プログラム、教育プログラムでは無理です。

あと同時に、若いアーティストを直接ライブハウスで発掘して、過去の歴史や文学とあと音楽を使いながら、最新のこういう技術について学ぶということをやっています。やっているうちにいつの間にか私も演者になっていて、先月、舞台に立ちました。

ところで、前提なのですけれども、多様性って何ですか、教育の。多様性って何？

教育って、結局支援に当たって障害者やLGBT、あるいは外国籍の子どもということを区分し過ぎてパニックになっているのですよ。無理です、今

の状況で。

どうやらこの多様性というのをひもとくには、まず表現はどうやってできたのだろうという歴史をやるとよさそうということで。日本人は文学、画像とはまた別のところで、実はもともとの表現って音楽とダンスではないですかということで、やります。ちょっと見ていてください。

要するに、ダンスはいろいろな種類があるのですよね。例えば、同じダンスでも、同じジャズダンスだとこんな感じでちょっとおしゃれな動きをしますのでけれども、ヒップホップは地上を飛ぶような動きをします。それに合わせて、実は今日、競技かるたで読まれる空札というのを読もうと思ったのですが、ハプニングが発生しました。よくあります。

45歳で新たにこういう学びに突っ込むのは、やはり若い人のところに自ら行く。この表現方法を教えてくれたのは、実は30代の発達障害のDJとダンサーなのです。彼は非常に私よりヘビーなのに楽しそうなのですよ。それがちょっと気になって追いかけていたのですけれどね。

学びをサポートする技術というものが世の中にありまして、最近のDJは、いろいろな技術で成り立っているのですけれども、結構格安でネットがあればできる。聴覚や音楽知識のない人でも勝手に解釈してくれるので面白いですという話です。

例えばこれなのですけれども。ちょっと音は出ないかもしれませんが、飛ばします。ここが速度です。これが波です。音の強弱で、ここの5で合わせると音がぴったり合うらしいと、そういう技術があるのですけれども、もう無理なので飛ばします。

教育の多様性と個性は、教科書に正解はなくて、多様性に定義はない。だから教科書を超えた社会の中にあるはずで、個性の尊重はいろいろな社会に触れることではないですかという問いかけをまずしたいと思います。そもそも教育の前に。さあ、区長はどのようなお答えを出すのでしょうかということで、こちらからは一旦返させていただきます。ありがとうございます。

区長 非常に興味深い話で、ありがとうございます。発達障害については、教育の現場でここ数年で非常にいろいろ研究も進んでいると思うのですけれども、まだまだ私は足りないという部分があると思っていてまして、稲田さんが今まで何か学校の中で生きづらいとか、居場所に迷ったということはありませんか。

稲田 毎日学校でフルボッコにされるわ、靴隠されるわ、ずっといじめを受けていましたね。体も弱かったので。家に帰ると、親が昔から暴言も暴力もひどいので、居場所がなかったです。かなり精

神もちよっと。髪の毛が抜けたり、痔臓を患ったり、結構大変でした。

区長 この中野は、私は多様性があるまちだと思っていて、その多様性というのは、緩やかなつながりと私は言っているのです。いろいろな人が住んでいるのだけれども、それはそれぞれお互い尊重して、そんなに干渉もしないけれども、尊重もするというような微妙なバランスが、都会の特徴にもあるかもしれません。それが私はすごく居心地がいいと思っているのですが、中野でそれを感じるところはありますか。

稲田 いや、逆に居づらいです。というのは、恐らく、警察とか行政があまりにも治安をよくするために、いろいろ夜回りすることで、逆に本当に人慣れしていないホームレスなど、私たちのような当事者、パフォーマーが、中野の外に今、転出しているのですよ、話を聞くと。渋谷、子育てだと練馬、新宿。子育て世代は逆に杉並。当事者の声、ちゃんと聞いていただいています？というのは、ちょっと疑問です。

区長 それは今、警察の話が出ましたが、警察だけではないということですね。

稲田 警察だけではないです。夜回り団体すら本当におびえている人間には怖いのですよ。いきなり知らない人が声をかけてくるって十分怖いので。

区長 では、町会の人たちが見回るということもですか。

稲田 ああいう人ですら怖いのです。当事者にとっては。

区長 分かりました。今日はどうもありがとうございました。